特258 16
18
796

山姥

昭和改訂版

内八

始

特258
296

山姥

（梗概）都に名高き百萬山姥といへる白柏子、信濃國善光寺に參らんと北陸路より、あげろ越えといふ山路にかゝりしに俄に日暮れ、前後を忘ずる折柄一人の女性現れ、一夜の宿を參らせんとてその山家に導き、御身ハ都に隠れなき百萬山姥なるてまし〜ままさば眞の山姥が妄執を晴らす爲めその山姥の唄の一ふしを聽かさせ給へといふ、さらば謡はんと曲を押しどゞめ迚もさらば今宵の月の出づるを待ちて我も亦た眞の山姥の姿を現さんと夜の更るに隨つて恐ろしき眞の山姥の姿を現じ、人界種々の相を曲舞にして說きかなでつゝ、或は謡ひ或は舞ひ、果ては山廻りの苦しさ、樂しさなどを妄曲に述べたる後、又山を廻りて行方も知れず失せにけるとぞ。

昭和二十年十月一日 帝國圖書館

シテ　女
後シテ　山姥
ツレ　遊君
ワキ　従者
ワキツレ　同三人
所　越中國境川
季　不定

弓次第
ワキ上
立ル
三人

山姥

よ[illegible]ぬ[illegible]そと[illegible]たのむ〳〵仏乃ほとけ
[illegible]ん　ワキ詞　是ハ都方より住居する者にて
ひゝを渡りひゝ方ハ都より原を通ま
さぬ百麻山姥と申遊女にて候
山姥の山廻りをいふ事を世義

に作り出ぬよるべ京臺の付申た
る吳名ゆゑに又当年八月親北十三
年よあとせ殺ひて引籠よ芋先ち
出来ゆゑ度世伝ひ写る ひとまず 伴ひ申
只今伝法國へと急ひ 立流上 三人 都を出て
小波や 志ゞの浦 私こゞまで来ハ芋

永の山越て神よ雲ち海ゆ江の橋無
て来あ海越波乃旅思ひやるこ我ゑ
なまき 上 精波ゑつ漕こ一の〳〵
あ宮乃松北夕烟きへぬ夏身北飛を
き海弥陀の剣北筋波山 歩 雲波う海
ゞす三越波乃國の来なる里とへバい

世ぞ都ハ遠ざかり境ハ近くなる事
こゝにて中ゝ
里〳〵 わき 名山の程より見ハ是ハ載沒と
我中と北境川より是ハ見えハ是より西光
寺へ乃道数多ある中ハ何まで本
乃ぞ所の人より西ふぜるにてハ つき むよ
てハ わき 先〳〵ハ 屋ハ しか 西光寺

への論次乃相論西乃てハ上道下道
あ者乃ゝへ 上 ハ 己 乃
弥陀唯心の浄土にたとへらまてる乃よ
てハ但法華物北叶ハ如世中ハ 実 つき
や常ゝ西方の浄土ハ十方信ゝと
うや愛ハ又弥陀来迎乃相論なれば チョク

あぎろの山とやらんよ参りゐ侍し
とて色濃行の松なれば無物を見よ
やとめ墨かちはざしにて参りゐべし
乃志るべしてたびゆへ わき はちばを中
ゆべし シカく さ河ばを拾て四方有ふぞ
海にてゐ シカく なるふく お宿参せ

う有ふ見るあげろの山とて人里遠き
所也 わき 見る初て
善光寺へ参る者にてゐ行義者沒を
忘じてゐ処よ 婚しくも承ゐ物ゆ はちぶ
見へ参りゐ して 七宿北お宿参せ
事 所分 思ふ 四あ里 承及る山

姥の哥乃一ふしうたひて聞かせ給へ 都
の思ひいでとも成べし 其為にこそ日を
暮し 御宿をも参らせて候へ いかさ
様にも謡ハせ給へ

わき 是ハ思ひもよら
ぬ事を承る物哉 扨誰と御覧ぜられ候
て山姥の哥の一ふしとハ御所望候哉

して 何をか包ませ給ふらん あれにま
しますは百萬山姥にてハましまさずや
先此哥の次第とやらんハ よし足引の
山姥が山廻りすると作られたり あら
面白や 此名ハ世辞によまでの
異名にて渡らせ給ふ 抑誠の山姥をバ

何とわすられて候ぞ　わき 誠の山姥ハ
山にすむ鬼女とこそ曲舞にハ見えて
候へ　シテ 山に住鬼女とハ女の鬼とやよ
し鬼なりとも人なりとも山に住女ならバ
わらはが身の上にてハさむらはずや年比
色にハ出させ給ふ言の葉草の露程も
御心にハかけ給ハぬ恨を申に来り
たり　道を極め名をたてゝ世情万徳の
妙花をひらく事此一曲の故ならず
や　然ばわらはが名をも弔ひ舞歌
音楽の妙音の声仏事をもなし給はゞ
などかわらはも輪廻を遁れて帰性の

吾処よりもとゞけんと。恨を夕山の雁、
獣も啼き捨へて。あらをあぐる乃北山姥ぐ
霊鬼見とて来りしつる　姫しゐの子
を守り拘うる。拘も謀北山姥の見とて来
里殺へるう　我國こ乃山回りに帯ふ
しも重よ回り逢る。家名乃法我

きうん為也。法殺ひて去とてハ我為牝
を時しぬへ　上　ゆ上ゆ角番しあぐ
れそろしやゞ為北為や何しかりなん
と惜なゞら時の調子をゆや拘子我
まそむれバ　して　ゆぐさせ殺へとてもけらバ
くるを結て月の如ぎ様に法殺ハゞ我

も又謡の深きを照らすべしまいやかげろふ夕月乃　さなきだに暮るゝを急ぐ深山邉の雲に心をかけそへて此山姥が一聲を夜もすがら謡ひ給はゞ其時我が姿をあらはし移り舞をまふべしといふと見えてまづ其儘かき消すやうに失せにけりく

わき詞　さあらば始て此謡をうたひまゐらせ候べし

つき上　餘り此事のふしぎさに更に誠とおもほえぬ児女が詞をたぐへしと

わき上 立衆 三人　松風と共に吹笛乃く声澄渡る谷河に手まづさへぎる曲水の月に声すむ深山

うな〳〵　あら物すごの深谷や
なあら物すごの深谷やな　寒林に
骨を打霊鬼泣〳〵前生の業を恨み
深野に花を供ずる天人返す〳〵
幾生の善を悦ぶいや善悪不二
何をか恨み何をか喜ばん万箇目

前の境界懸河渺々として巌々
たり山復山いづれの工か青岩の
形を削り出す水又水誰が家にか
碧潭の色を染出せる　おそろしや
さも物すごき青乃まの月も木深き
山陰よりもれけしきかなさせふい

り相はきる空へつるべ其心焼まてまし海
をら（詞）して迎もま鍾を出初し云のを乃
ぎし紀ふを志ろしめさ海べし我まる
ひき路ひそとよ（つま）ばよはおそろしなど
ら烏羽むのくら海ぎれよ里路き出る
海詞ち人なれだ（して）饗にも花どろ乃

昭乃光ち星乃ちく
扨面ハ名ふ（つま）海丹海雲の（して）彩ハ尾乃
鬼の加ち（つま）今ち者初て見る事を
（して）伊ふたとへん（二人）古へへの（同上）見一口の一回空
黄に（歩）神なる里さふぎお指ろし紀
（トリセ）里を（マ）思ひ白ふ（ヒト）ら伊ぞと問し人ま
（ヤヲ）（ヤヲハ）

でも歩身の上よ求ぬべき浮世語りも
さづかしや　　まの実北一対
をみ金ものくへどとふ花に清香月
よ法見るもひのたまきくよ指きあふ
人の野北一名生一刎もあこ実よを
やく後語ふべし　　上実上るもも

角もいふ及ぬ山中に　　一対乃心
多羽をとく　　つき　　袖も
白妙　　雪を回て　　上は山もの　　雑波北
手り　　法　　ぬ　　回不弟　　上　　上　　実乃
山うをゞく山回りすゞきくるしき
上　　実山といつを若ひぢよりおこりて　　天

雲かゝる高き峯北岸　海は岩の霞よ
里ちゝ里　月　波濤をとゝむ万水たり
上一洞ちゝき岩の奥　横ふひゞく山彦北
月　奥深き音をきく便と形り奥にひゞくぬ
岩もゞ形と望みしを実かく風ゝん
して上　陸よ我住山河の奥色山高ふして海近

く岩深ふして水遠し　月　奥は海水
奥ゝゝとして月出の光をかゞげ浪ふ
ゝ岸松巌ことして風常楽乃夢哉
破ふ歩ヤ遠近のたつぎも知ぬ山中よ覚
来ゝくも峰ゝ者のおすごき和りくは
伐ボ丁こどしてヤ山更よ遊ゝり法性

岸浮くハ上求菩提を願ひ、無明
の深き海に沐ひ下化衆生を表して
煙乾隙よ及べり抑山焼き生ぶ雨も
ちゝぶ雨もなく只雲水を使りにて
ゆゝしき出乃巣も形して先きバ人間よ
能ぶとゝく　問つる雲の分をゝかり

に自性を変化して一念化生北鬼女
となりて因縁よ来きたり形正一如と見
る時ハ色即是空甚まゝよ仏法あれバ
世法何里煩悩何きバ菩提あ里ヤ仏あ
きバ衆生あ里衆生何れバ山焼もありヤ
極ハ深き紅乃色ゝ人間よ遊ぶ

事　武時も山賊の捕縛を逃れむの法
休む空蟬の肩を加へ月法せる山を
出里に送る折もあり又武時も殘姫の
百樣たつる宮に入る枝の響く
弱殘北肩に身を和き人を助くる業
をのこ紛のめよ見へぬ君とや人のいふん

して上せ
世を空蟬の肩衰　すゝ八ぬ袖よおく
雲も東雲北月に埋き搖きむ人の
孤乃ふ子ゝ方あるの船よあり北ぎく
うつハしで山姥ぐ業なれや物よ詠りて世
語よせ世孫へと思ふ物も島物峰う
ち捨よ何事もよし是我の山姥ぐ山巳

[illegible]
里をるぞくるまきは太コ七合 見渡の　山回り
[illegible]
カケリ一樹の陰一河乃流まき　岩見名生乃孫ぞ
[illegible]
うしろ浦てや家名茂夕月の落茂
[illegible]
渡る一岩も　狂ゑ孫語の乃まそ　謀仏ム
[illegible]
奈の関ぞうし　あゝ五名孫婆やいと苦ヤヲ
[illegible]
中て　陽る山乃　まゝ　樹よはくらと結

[illegible]
花を弱て山回り　秋ハさやけき
[illegible]
歌を男て　月見宿才にと山めぐり
[illegible]
冬ゆさへ　冬く時　回乃雲の　雪をさそ
[illegible]
ひて山回り　回りくて　於回を縫き
[illegible]
ぬ島孔の雲乃　蓬ゆもつて　山姥とな
[illegible]
き宿カリスム　鬼女ゆ　樹見るやくと　呼り

彌里ゝ茫々ひぐきて今を盛りの河海よ
世見へしぐ山又山ゝ山巡り山沒山ゝ
所ゝ山ゝ山ゝ山ゝ山ゝ山ゝ山ゝ山ゝ
めぐりしぐ彼潮を志ぐ果ゝ

7.25

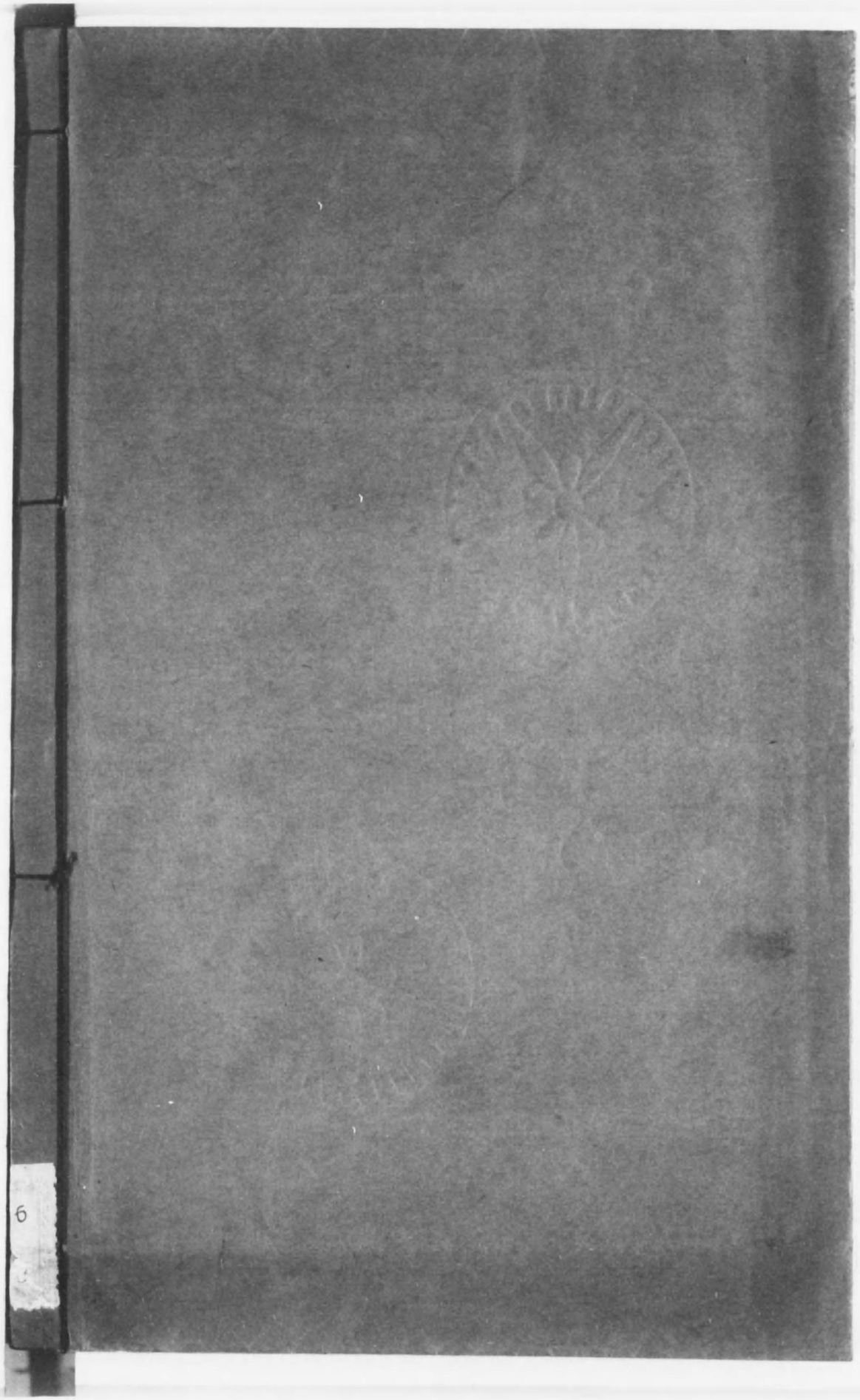
著作權所有

昭和九年七月廿五日印刷
昭和九年七月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地
著作者　寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謡本刊行會

終